

# 特集

## 地域とともに歩む山口大学 ～社会貢献活動の紹介～

### 山口大学の 社会貢献活動について



村田 秀一  
副学長  
社会活動委員会委員長

#### はじめに

今、国立大学が未曾有の状況にあることは連日の新聞報道もさることながら、教授会での膨大な資料などからも認識頂いているものと思います。これらの背景は、日本の戦後を支えてきた社会組織・構造の改革に連動したものであります。特に国立大学におきましては、法人化を目前として特色ある大学への再構築・構造改革に取り組んでいます。

山口大学におきましては、この機を逃さず代表的な「地域基幹総合大学」と位置づけられる大学を目指しさまざまな検討を重ねているところであります。地域基幹総合大学の最大の課題は、大学の本来の役割である研究教育活動の成果をいかに地域に還元するかということであります。

#### 山口大学「社会活動委員会」の役割

山口大学では、平成13年に山口大

学の運営方針、戦略などをスムーズに決定するため、学長のもとに主として部局長から構成される7つの基本委員会を設け、その基本方針に従った運営、活動がシステム化に行えるように、それぞれの基本委員会のもとにいくつかの専門委員会を設けました。これらの基本委員会のひとつが「社会活動委員会」であり、この委員会の設置により、これまで各学部やセンターが独自に行ってきた社会貢献活動を大学として戦略的に統括して実施していくことが出来るようになりました。また、社会活動委員会のもとに、市民への生涯学習プログラム、地域への人材・知的資産提供などを統括する「地域交流企画専門委員会」、産官学連携活動、民間企業との共同研究・技術開発、起業家支援活動など統括する「地域共同研究開発センター運営委員会」、山口ティー・エル・オーと連携して産業界への研究成果・知的所有権の還元、技術移転活動などを統括する「TLO専門委員会」を設けています。

#### 山口大学の産官学連携活動は トップ10

山口大学の共同研究は平成12年度114件で全国8位となっています。また、すばやい山口ティー・エル・オーの設立、その後の特許出願件数、技術移転件数におきましてもトップ10にあり、文部科学省、経済産業省からも高く評価されています。その結果、地域共同研究開発センターは増設され、来年にはリエゾン部が設置される。さらにインキュベーション（オン・キャンパス）施設も計画しているところであります。インキュベーション施設とは、起業を決意し

た学生、教員にその立ち上げ期にこの施設を活用させるものであり、また、法人化後は大学等がこれらのベンチャー企業に出資することも可能になると思われます。これこそ、まさに「地域基幹総合大学」として飛躍できる要因であり、大学の構成員の意識変革とこのような活動のさらなる躍進を期待するところであります。

#### これから社会貢献活動の展開

山口大学はすでに実績のある産官学連携活動をさらに強化すべく、工学、医学系ばかりでなく農学系の研究成果の産業界への還元を強化するつもりであります。また、人文・社会科学系と自然科学系の連携によるベンチャー関連活動もさらに充実していきます。

地域交流企画専門委員会におきまして、山口大学を地域に開かれた「地域基幹総合大学」とするため、次のような方針を定めました。

- ・地域の人々に、公開講座、生涯学習プログラムを積極的に提供します。
- ・サテライト教室を開設し、多くの県民に大学を活用できる機会を提供します。
- ・初等教育機関との連携も強化し、出張講義などを提供します。
- ・これまで公開のチャンスの少なかった知的資産・施設を定期的に開放します。

山口大学は、その知的資産故に地域になくてはならない基幹機関として認知されるように社会貢献活動を充実していきます。

# やまぐちの くらしの中へ

## ～人文学部の 生涯学習事業について～

富平 美波

助教授

人文学部言語文化学科

「広い。この伸び伸びとしたスペースはすばらしい。」「縁がいっぱいだ。」「学生気分になり、いいね。」「学生の皆さんは自由を享受しているという良い感じ。」「堅いイメージ、知的でまじめだと思っていたけれど、キャンパスに入ってとても楽しそうな感じがした。」「学生にとって、落ち着いて学べる場のような気がします。」「広い構内を作ったことは、山口県として先を読んだ良い事業であったと思いました。」

これは、ふだんあまり大学を訪れる機会のなかった市民のみなさんが、山口大学（吉田キャンパス）に足を踏み入れての印象を自由に語られたものです。もちろん、かなり好意的におっしゃってくださったものでしようが、でも、これらの言葉に接した瞬間、私たちは、山口大学の教職員として、あらためて「山大に居ることの張りと誇り」を感じることができたのでした。こんなすばらしい瞬間を持つきっかけを与えてくれたのは、人文学部が今年春から開始した生涯学習講座「やまぐちサタデー・カレッジ」でした。実は、上の言葉は、「やまぐちサタデー・カレッジ」を受講されたみなさんが、講座終了時のアンケートに答えて書いて下さったものなのです。これから、大学・市民・地域が一体となつた人文学部の生涯学習事業について、その概略をご紹介したいと思います。

### 1. やまぐちサタデー・カレッジ

山口大学人文学部は、今年（平成13年度）から、従来1年に1回行っていた公開講座を大幅に拡充し、「やまぐちサタデー・カレッジ」を開講しました。1年を前期と後期に分け、そのどちらにも、毎土曜日の午後、8回或いは15回で完結する講座を複数開講するというものです。ちなみに今年度は次のような諸講座を開講しています。

前期（5月～7月）

①異文化交流コース

「東西文化交流の諸相」

畠地正憲教授

②現代文化コース

「『星の王子さま』を翻訳で読む」

井上三朗教授

③外国語学習コース（英語）

「映画で英語を楽しもう」

太田聰助教授

後期（10月～12月）

④やまぐち学コース

「山縣周南を読む」

豊澤一教授

⑤外国語学習コース（中国語）

「中国語中級読本一小品を味わう」

富平美波助教授

根ヶ山徹助教授

オムニバス方式の講座が多かった従来の公開講座に比べ、1人の講師と毎週接し、よりきめ細かく、じっくりと学問を語り合っていただけるようになりました。また、すべての講座を5つのコース（やまぐち学コース・異文化交流コース・日本文化コース・現代文化コース・外国语学習コース）に分けたのも新しい試みです。5つのコースは人文学部教官が蓄積してきた知的パワーと市民や学生のみなさんの文化的ニーズを考え合わせて決められたものです。なかでも「やまぐち学コース」は、大学がこれまで地域の歴史・文化・社会構造などの研究にご協力してきた経験をフルに生かす自慢のコースです。また講座には学生の参加も許可しています。学生のみなさんにとって、社会人の方々や、次の世代である高校生の人たちと共に学び、その人格や学習態度などから薰陶を受けることが、授業にも勝る勉強になると信じられるからですし、一般市民のみなさんに対しても、これから大学の授業や施設が公開の度を強化して行く道を開くきっかけになればと望んでいるためです。一定の出席回数を満たせば単位を明記した修了証も発行されます。

前期の講座には、新しい試みとい





うことで各メディアでも報道いただけたためか、100名近い受講者が集まりました。社会人・大学生・高校生・山大生・留学生が混然したにぎやかさで、施設などの面に細かい問題はあったものの、おおむね好評を得ることができました。終了時のアンケートでも、「これからも続けて欲しい。」「いちだんと拡充の方向で。」という声をたくさんいただきました。受講のみなさんにはこれから多くの要望を出していただき、生涯学習が市民生活の一端に自然に溶け込めるよう努力して行きたいと思います。

## 2. 出前講義と徳山市での事業について

山口大学人文学部では、生涯学習を通して地域社会との交流をより深めていくようなプロジェクトにも挑戦しつつあります。今年度から、地域の生涯学習グループや高等学校などのリクエストに応じて講師を派遣する「出前講義」を開始したほか、地方自治体と連携して新たな生涯学習のプロジェクトにも取り組み始めたところです。

後者に関しては、現在、県内の中心的都市のひとつである徳山市と連携を深めつつあります。まず手始め

に、市が主催する「徳山オープンカレッジ2001」に「現代家族の社会心理」(高橋征仁助教授)と「日本の方言を考える」(添田健治郎教授)の2講座を開設し、市民のみなさんからたいへん好評を得ることができました。

さらに11月からは、徳山駅ビルが公共施設として新装オープンするのに合わせて、徳山市と県内の高等教育機関5校（山口大学人文学部、山口県立大学、徳山大学、徳山女子短期大学、徳山工業高等専門学校）が連携して運営する「徳山サテライトカレッジ」にも参加することになっています。これは、駅ビルという中心市街地の中核施設を拠点に、各校の特性を活かして、通常の講義に近い（専門性の高い）多様な講座を開講し、高度な教養や専門知識に対する市民のニーズに応えようとする試みで、現在、市と各大学の代表者が構成する「徳山サテライトカレッジ運営委員会」において企画を立案しているところです。一般の勤労者が広く参加できるよう、夜間講座の充実を図ろうとしている点も大きな特徴のひとつです。何よりもユニークな点は、地方自治体と国公私立の高等教育機関が連携しつつ、新幹線駅も併設されているような大規模な駅

ビルを、市民文化の拠点施設として再生しようとしている点でしょう。

近年、全国各地の都市部で中心市街地の空洞化が深刻な問題となっていますが、この「サテライトカレッジ」は、そうした趨勢に歯止めをかけようとする「まちづくり」の一環でもあります。地域の大学・高等教育機関が協力して、生涯学習講座の拡充に取り組みながら、同時に市民文化の拠点形成と中心市街地の再生に参画しようという動きは、全国でもきわめて珍しいのではないでしょうか。

人文学部というと、文系基礎学が中心という学問分野の性質上、とかく現実社会と接点のない「象牙の塔」だというイメージがあります。でも実際には、このような新しい取り組みにチャレンジしつつ、地域社会との絆をより強固なものにしようとしているのです。

(なお、2の出前講義と徳山市での事業に関する部分は、人文学部生涯学習委員会委員としてこの方面的プロジェクト立案に尽力してこられた横田尚俊助教授のご協力を得ました。)

# 社会貢献

## —ベンチャービジネス論教育—

城下 賢吾  
教授  
経済学部経営学科



今年のベンチャービジネス論は全学部から250名近くの学生を集めて行われました。ベンチャー論と言う言葉を聞いただけで敬遠気味であった学生の意識にも確実に変化がおきているかもしれません。これまで企業に就職さえすれば将来は安定しているという状況が無くなりつつある今日、自分の将来は自分で切り開かなければならないという気持ちが彼らにも生まれつつあるのかもしれません。

昨年から開講しているベンチャービジネス論は地域の問題点を見つけて解決するために単に講義を聞くだけではなく街にも出ています。その大きなねらいは学生の元気・能力を地域活性化にいかすことです。人に指示されて動くのではなく自分の頭で考え方行動する人材を育成することにあります。これまで、学生は地域から消費者あるいはアルバイトの担い手ぐらいにしかみられていませんでした。しかし、最近では地域づくりの生産者としての期待が高まっています。ここでの生産者という意味はものをつくるということだけではなく感性やアイデア・行動力を地域の発展にいかすひとたちのことをいいます。彼らの頭の中にある突拍子もないアイデアを実際に現場で実験し

てみることが大いに期待されています。

### 1. 起業シティLet's

ベンチャービジネス論から1つのプロジェクトが生まれました。市が提供した空き店舗、山口市道場門商店街にある旧ダイエービル4階に9月1日『起業シティLet's』をオープンしたことです。店舗料は安いので本来ならば商業ベースにのらないような色々な取組みが可能になっています。中にはいっている店舗としては、学生や女性起業家などによる商品ショップやインターネットカフェ、期間限定のチャレンジショップなどがあります。また、ロボット製作やチビッコ・パソコン塾・元気カレッジ山口などのイベント、ベンチャービジネス論の講義もおこなっています。9月から1ヶ月間山口大学の学生だけではなく、下関市立大学や鹿児島大学の学生もショップを開いたり、イベントを開催したりしました。起業シティLet'sの管理運営は学生起業家が中心です。

彼ら素人集団は開店から今日まで、いかに4階までお客様に足を運んでもらうかに苦心しています。彼らはどのようにしたら人が動き、どのようにしたらものがあるかサービスを購入してもらえるかといったような実務経験を持っています。経験者からのアドバイスを受けたり、ベンチャービジネス論でた提案を実行したりと試行錯誤で運営しています。たとえば、出入り口近くに売れ筋ショップをおいたり、上記で紹介したようなイベントを頻繁にやっています。また、幅広く市民の方に認知してもらうためのビラ配りをしています。このように、彼らは大学で勉強している経営学を実践できる場を持っています。今後の課題は周辺の街のにぎわいを呼び戻す一方で、ビジネスとしてそこそこ

の利益をあげていくことでしょう。そのため、学生が持つ元気・アイデアを実際に試すチャレンジ精神が必要になります。

### 2. 山大生テレビ出演

この4月から始まったベンチャービジネス論の活動は10月26日テレビ山口で「外へ向かう思い、自立、信用、鮮明に生きる」などをキーワードにして、ベンチャービジネス論講師と山口大学生とのトークを交えながら3時間生放送されました。なお、この番組で流されたビデオはベンチャービジネス論の講義中や夏休み期間中にすべて山口大学生によって撮影されたものです。学生起業家の日々の活動記録やプロジェクトの一つである『にほんの祭り』などが収録されています。

E-mail : sirosita@  
po.cc.yamaguchi-u.ac.jp  
☎ (083)932-6801



## 教育学部の 地域社会への貢献活動



阿部 弘和  
助教授  
教育学部  
大学開放活動運営委員会委員長

地域社会への貢献は、教育、研究と並んで大学の最も大切な責務となっています。また、知的資産が蓄積された大学は生涯学習社会の実現へむけて、重要な役割を担っています。教育学部はこのような観点に立ち、生涯学習、リカレント教育などに関わる活動をはじめ、多様な社会貢献活動を行っています。そして、組織としても、平成8年に大学開放活動運営委員会を設置し、開かれた大学づくり、社会への貢献活動の推進にあたっています。

### 1. 大学へ

地域社会へ開かれた学部として、さまざまな人々に教育や研究の機会を提供しています。まず、大学院へは山口県と連携をはかりながら約30名の現職教員を受け入れています。また、学部へも3ヶ月～1年の期間で、現職教員、養護教諭などの社会人を恒常に受け入れ、研究や研修の機会を提供しています。さらに、単位等履修制度を活用して、相当数の受講者を受け入れています。そして、社会貢献を目的の一つとして運営されている教育実践総合センターでは心理教育相談室を開設し直接的な社会サービスを行うほか、実践的

な公開講座を開設するなど多様な活動・事業を展開しています。また、今年度はこれら日常的な活動の他、市民に教育の機会を提供し、地域社会との連帯を深め、一方では、学部自身の活性化をはかる事を目的とした事業、『大学の日』を実施します。

### 2. 大学から

開かれた学部として、多くの人を受け入れる一方、学外へ向けての活動も展開しています。もっとも普通に行っているのは公開講座で、平成13年度には7講座を開設しました。平成8年～13年に山口大学では73の公開講座が実施されましたが、半数近い34講座は教育学部によるもので、最も熱心に公開講座に取り組む学部となっています。また、行政機関と連携して、認定講習や資格取得のためなどの社会人プログラムにも恒常に多数の講師を派遣しています。これらは学部の組織だった活動ですが、個人的にも、教育現場を含む、さまざまな場所で開催される、講習会、研修会、研究会などに、多数の教官が講師等として参加し、高等教育機関の教官としての責務を果たしています。また、国や市町村に設置された、諮問機関や専門的な委員会等でも活動し、行政機構のなかでも役割を果たしています。

教育学部には6つの附属校園が設置されています。教員養成と地域の学校としての教育がその役割と思われがちですが、学部教官も協力して行う、先進的な教育カリキュラムや授業プランの開発・研究が附属校園の大切な責務となっています。そして、これらの成果は各校園ごとに開催される研究会や講習会を通じて広く公開されています。そのいづれも県外からの参加も含む、多数の参加者を集める、山口県で最も大規模で、欠かすことができない教育活動となっており、地域の学校教育の質

的向上に深く貢献しています。

### 3. 今後の課題

社会への貢献、開かれた大学は、先進国では大学運営の大きな柱となっていますが、日本ではこれらは正式な大学システムには組み込まれていません。したがって、通常の業務の合間にぬっての、個人的な努力が要求されています。教育学部においても個人的な努力は限界に近づいています。また一方では、その活動が個人として評価されない傾向があります。これは全国の大学の共通の悩みであり、大学の課題として、具体的なシステムの構築が望まれます。

教育学部においていえば、我々が行う諸活動は「何かを発明する」、「収益をあげる」ような、目に見える成果が得られにくいためか、低く評価される傾向を感じます。本来大学の活動の評価には、分かりやすい実際的な視点だけでなく、長期的で多様な視点も必要で、それに基づいて評価されるよう望んでいます。





# わいほーネット



奥田 昌之  
助教授  
医学部医学科

## 活動を始めた経緯

県内の電子ネットワークづくりのために、山口大学総合情報処理センター久長穂先生や医学部医療情報部井上裕二先生にご協力いただきメーリングリストを中心とした山口県内情報発信、討論の場としてわいほーネットを管理しています。

平成10年秋、山口県内で遠隔地の医療機関で画像診断、コンサルテーションが行えるシステムの検討が井上裕二先生を中心に始まりました。山口県保健医療福祉ネットワーク（わいほーネットの本体）の活動を始めるにあたり、ネットワークへの参加促進、公共性のある事業の県民への広報のためにメーリングリストを始めようと提案したところ井上裕二先生にご理解いただき、平成11年初めに医療情報部にある機器を使ってサーバーを立ち上げることができました。「わいほー」には、「山口」と「健康Health」の頭文字をとつて日本語らしくしたものでした。私は当初メーリングリストに別の目的として、同じころ準備段階にあった介護保険制度導入の混乱になにか役立てればよいと思っていました。

## どんな活動をしているのか

現在メーリングリストには、234アドレスの登録があります(平成13年10月)。山口県の情報発信の場としては、登録数が比較的多いメーリングリストだと思います。自由な雰囲気を残すために参加者自身が登録をするようにしています。山口県、市町村の保健医療福祉担当の行政の方、地域医療の従事者、ソフト開発担当者、学校、大学の教官などがおられます。なかでも活動初期に小野田市の保健医療福祉ネットであるHiFo-netの参加者にそのままご参加頂いたことが、大きな前進となりました。

共有している情報は、行政などからの情報発信、データの紹介、講演会、研修会の紹介です。私など立場上、県で行われている会議資料や公表資料を分かりやすく解説したり、保健医療福祉に関わる問題提起をしています。また、県内各地で行われる講演会、研修会の案内を紹介していただく方もあります。それが職種を越えた連携につながっているようです。介護保健や障害福祉の問題提起、質問もあります。もちろん、山口県内での遠隔医療などに関わる新規モデル事業なども随時紹介しています。

## 社会貢献へ

メーリングリストでは、互いの顔を知ることなく質問、意見が発信され、回答、返事にボランティアの気持ちで応えていただいています。メーリングリスト上で発言された方に研修会や講演会などでお会いしたとき、「はじめまして、わいほーネットでは存じ上げています。」と言われることがしばしばあります。他にも登録者同士がはじめてお顔を合わせて話しが弾んだことも聞いて

います。各地のさまざまな職種の方がいろいろな情報を活用していただい るようです。

併せて、市中の病院の看護婦さんにお願いしてホームページ上の掲示板も作っています。山口県というこ とで発言も少ないようですが、県内各地で地域性のある情報発信の要望があることがわかりました。

## 今後の活動

山口県内の保健福祉へ貢献すべき医学部医学科や保健学科の教官にもさらに参加していただき、医学部の知識、技術を社会へ還元できれば望ましいと思います。多くの方に 参加いただき、山口県ならではの情報を発信できるようになるとよいと思 います。

山口県や各市町村のホームページでの情報公開やCATVなどを活用したネットワークができる、不要な機能もあり、今後の運営には課題があります。自由な雰囲気でできあがったものですから、県民の要求に合うように形を変えていかなければいいと思っています。最後にホームページを紹介させていただきます。

わいほーネット：山口県の遠隔医療・福祉に関する研究会です。

<http://www.medyamaguchi.gr.jp/>

わいほーネット：一般の方のページで参加登録ができます。

<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/5167/geobook.html>

## 農学部附属農場における社会貢献活動

藤間 充  
助手  
農学部附属農場

農業は食料生産を行うという点で、人類の最も重要かつ基本的活動と言えます。また、近年は地球環境、自然環境への関心の高まりから、農業の重要性が一段と増加していると言えます。しかしながら、農業人口の減少、農地の転用、輸入農産物の増加などに伴い、農業の現場は我々日本人にとって遠いものとなっています。このような状況を踏まえて、本農場では学内外を問わず、多くの方々に農業に触れ、食料生産とそれを取り巻く環境について考える機会を提供するために数々の活動を展開しています。その内のいくつかについて紹介いたします。

### 1. 「農場での体験」

～自分で米を作つてみよう～

これは、小学生を対象に日本人の主食であり、最も身近な作物である、

#### 稻作体験



#### ナガイモ栽培体験



(大殿小学校：5年生、約100名)

6月6日に正門横の水田約10aの田植えを、7月17日に田んぼの除草作業を、10月10日に稲刈りを行いました。刈り取った稲は乾燥、脱穀した後に学校に届け、給食に出して味わってもらう予定です。

#### (2) ナガイモとケナフの栽培体験

(大殿小学校：6年生、40名)

5月7日にナガイモの植え付けとケナフの播種を行いました。ナガイモの栽培は農学部生物資源環境科学科の西山教授の協力を得て、土管を用いた栽培法を用いました。10月25日に収穫を行いました。ケナフは、3m程の畦に2列で栽培しており、こちらも10月25日に刈り取りました。

YU農業塾で栽培している稲、ナガイモ、ケナフは附属農場のホームページに掲載することによって、子供たちが常に作物の状態を知ることが出来る様にしています。また、質問、

#### 2. YU農業塾

これは附属農場の技官が中心となり、市内の小学校に協力する形で行っているものです。小学生に農業を体験して理解を深めてもらうとともに、それを通じて感じた疑問に我々が答える、と言う方式で進めています。

今年度の活動は

#### (1) 稲作体験





## 地域共同研究開発センターのリエゾン活動

上西 研  
 助教授  
 工学部機械工学科  
 地域共同研究開発センター

疑問はfax、e-mailなどで随時受け付けて、その都度回答する体制をとっています。この結果、子供たちの興味を大きくするとともに、より多くのことを学んでもらえると思います。このYU農業塾は本年度学長裁量経費社会貢献・交流促進重点化経費の配分を受けています。

以上の活動以外でも、市内の保育所、幼稚園からの見学の受け入れをはじめ、多くの団体、グループ、個人に様々な形で利用していただいている。今後はインターネットを通じて情報を公開し、より多くの方が農業、食料、環境について理解を深める場として利用できる農場を目指したいと考えております。

■&Fax (083)933-5847  
 e-mail :  
 mtoma@agr.yamaguchi-u.ac.jp



### Biz&Tech相談室の開設

地域共同研究開発センター(CRC)では社会貢献活動の一つとして、センター設置時より技術相談の受け入れを積極的に行ってきました。最近では㈲山口ティー・エル・オー(TLO)とも連携し、岩国、徳山、山口、宇部、下関等の県内主要都市で地区別懇談会や技術相談会等を開催するなど、各地で山口大学の産学連携の取り組みについて繰り返し説明をしてきたこともあり、年間200件を越える相談がCRCあるいはTLOに寄せられるようになりました。そのような状況の中で、地元中小企業などからは、技術相談だけではなく経営に係わる相談も受け付けて欲しいとの要望も強く出されるようになりました。理系学部の教官だけでは対応できない問題点も生じてきました。そこで、経済学部の先生方にも協力を頂き、本年度よりYUCRC Biz&Tech相談室を開設し、技術だけではなく経営の相談にも応じられる体制を整えました。Biz&Tech相談申込書はCRCのホームページからダウンロードでき、相談内容をCRCにFAXすると、通常は1週間以内に、遅くても10日以内には返答が得られる仕組みになっています。受け入れ可能な内容の幅が広がったことにより、今後さらに相談件数が増加するものと期待しています。さらに、山口スーパーネットを利用したバーチャル・サテライト相談室を県内主要都市の商工会議

所等に開設する準備を進めており、より一層のサービス向上を目指しています。

### 研究会活動と情報提供サービス

CRCの研究協力会には9つの部会があり、各部会ごとに研究会や講演会を年2～3回開催し、最新の研究・技術情報の提供および現場技術者のための技術教育等を行っています。また、技術移転やニーズ・シーズマッチング等の推進を目的として、産業界・行政・大学の関係者が一堂に会する産官学フォーラムを毎年開催しています。今年度は中国地域企業と宇都市企業の展示会も併設開催し、1700名を越える参加者がありました。

また、定期刊行物としてセンターニュース(年1回)、センターニュースレター(年4回)、協力会ニュースレター(年5回)の印刷物を発行していましたが、今年度からネットワーク利用刊行物としてメールマガジンを新たに発刊(1回/月)し、各種補助金情報等をタイムリーに提供しています。さらに、社会人向けの教育プログラムのインターネット配信に向けて、プログラムの企画と映像の編集作業を行っています。

### 技術移転とベンチャー育成

吉田、小串、常盤の各キャンパスで特許講習会を毎年開催し、特許の啓発活動を行うとともに、各地で開催される特許流通フェアへ参加し、TLOが保有している特許や著作物の宣伝・営業などの技術移転活動を行っています。また、CRC寄附部門および客員教授による「ベンチャー一起業論」等の講義(計4単位)の開講、SCSを使った他大学学生や他地域の社会人へのベンチャー関連の情報提供なども行っていま

す。また、地方自治体関係者、大学関係者およびベンチャーキャピタルをメンバーとする「ベンチャー育成政策研究会」を毎月開催しているのをはじめ、IT分野に関する学生ベンチャーのインキュベーション支援も行っています。以上のようにCRCが行っている社会貢献活動は多様であり、CRCスタッフ全員、毎日が目の回る忙しさです。それでも、これらの活動は山口大学の将来にとって極めて重要だという思いがあるからこそ、頑張れている今日この頃です。

リエゾン活動	内 容	参加者	備 考
技術相談 (平成3年度～)	各種技術相談		約200件／年
講習会・セミナー (平成3年度～)	客員教授による特別講演会及びセミナー	50～70名	約15回／年
技術講習会 (平成3年度～)	高度技術研修	10～30名	年1回開催
研究協力会の活動 (平成9年度～)	研究協力会の部会活動 (研究会や講演会など) 産官学フォーラム	20～70名 約500名	各部会ごとに年2～3回開催 研究協力会9部会 (環境、生産情報、有機材料、セラミックス系無機材料、●●、微細加工、真空技術、建設、医療福祉、フードバイオ、メディアネットワーク) 年1回開催
ベンチャー起業支援教育 (平成10年度～)	技術経営とベンチャー ベンチャービジネス持論 ベンチャー起業論	50～70名	他大学でS C Sで配信
工業所有権講習 (平成10年度～)	特許講習会の開催	30～40名	数回／年
企業ニーズの発掘 (平成12年度～)	地区別懇談会の開催 企業訪問ヒヤリング	約60名 約40名	県内5ヶ所で実施

☎ (0836)85-9951

E-mail : kaminisi@po.cc.

yamaguchi-u.ac.jp

## 理学部サイエンス ワールド2001

富岡 憲治  
教授  
理学部  
自然情報科学科

青少年の理科離れが叫ばれて久しい。子供たちが理科好きかどうかを調べた国際的な調査によると、我が国では学年が上がるにつれて“理科がきらい”という割合が急速に増えて行くようである。ほとんど同じ傾向が数学にも見られることのこと。これは、科学技術創造立国を目指す我が国にとって、極めて憂慮すべき状況である。このような状況を打破し、青少年に理科を身近に感じてもらうことは大学の重要な責務である。一方、地域に対して開かれ、地域の住民に生涯学習の機会と場を提供することも大学の果たすべき使命である。

このような背景の下に、理学部では日頃行われている研究を広く知ってもらうために、平成10年度か



展示会場の様子

ら市民向けのイベントを行っている。ここでは、筆者が深く関わった平成12年度の「山口大学理学部サイエンスワールド2001」について紹介する。

実施委員には理学部の数学、物理、情報、生物、化学、地球科学の6講座から6名が選出され、6月から日程や内容について議論を始め

た。既に過去2回開催した経緯があり、どうすれば新鮮な内容となり、市民の関心を集めることができるか、また、いつどこで開催すれば多くの参加を得ることができるかななど、慎重に討議された。日時は、中学校や高等学校の行事なども考慮し、3月20日の春分の日に、また場所は交通の便や駐車場のこととも考慮



講演会場の一コマ



実体験型ブース



### 講演後の質疑応答

し、山口市湯田温泉の県婦人教育文化会館に決定された。

内容は、実体験型の展示が17題[‘数学的論理に親しむ’(数理科学)、‘機能性プラスチック’(物理)、‘レーザーとホログラム’(情報科学)、‘コウモリの超音波’(生物)、‘光触媒による環境浄化－光エネルギーの化学エネルギーへの変換’(化学)、‘山口県の地震危険度を探る’(地球科学)など]、少し高度な研究成果をも含めた講演を3題[増山博行教授(物理学)による‘相転移の物理学’、藤島政博教授(生物学)による‘細胞内共生細菌の生存戦略’と林昌彦助教授(化学)による‘グリーンケミストリ～環境に優しい化学～’]を準備した。これらに加えて、教官著作物や卒業論文・修士論文などを展示した理学部紹介コーナー、さらに科学に関する疑問に答える‘何でも質問コーナー’などを設けることにした。

本番に向けての広報活動としては、ホームページや、ラジオ、新聞などのメディアを通して行ったほか、チラシやポスターを県内の各高校、近隣の中学校へ配布し、周知を図った。特に、市内の小中高校へは、実行委員が手分けして持参し、校長に趣旨説明を行い、参加をお願いした。さらに、日が迫ってからは、街頭でのチラシ配布、また会場周辺の家庭への戸別のチラシ配布も行った。

当日には市内外から小中高生・一般市民約400名の来場があり、大盛況であった。小野田市、益田市など

遠方からも来場者があり、主催者としても大変良かったと感じている。来場者は一つ一つの展示ブースをじっくり見ておられたようで、会場内はいつも人だかりの状況であった。講演会場でも高校生や一般の方から盛んに質問があり、充分参加者の興味を喚起できたとの印象を持った。アンケートを集計した結果、大多数の来場者から、「非常に満足した」、「理学部の研究に非常に興味を持った」、「是非来年も来た

い」、との回答があり、所期の目的は十分に達成されたと感じている。

前日の会場設営から、当日の運営、さらには後片付けまで、理学部の学生諸氏に大変お世話になった。彼らの協力無くしてはとうていこのような事業は実現できなかつたと感じている。

この場を借りて深く御礼を申し上げる。この種の社会活動は継続することが重要であり、理学部では本年も実施計画が進行中である。



## 附属図書館の公開について ～一般市民の図書館利用～



上田 照賀  
附属図書館情報サービス課  
図書館専門員

### <知識を共有する>

附属図書館は、その「理念」（本年3月策定）のひとつに「知識を共有する：地域社会・国際社会への知的情報の発信を支援し、地域の人々との知的交流に貢献します。」を掲げています。また、これに関連する「目標」として「地域市民への利用開放と生涯学習機会の提供の推進」を掲げています。

この理念と目標の設定は、これまで山口大学附属図書館が一般市民を含む学外利用者に図書館サービスを提供してきた実績に基づき、さらに積極的な展開を促すものです。

附属図書館の利用規則には、当初から学内の学生・職員のほかに「その他、館長が認めたもの」の条項が含まれており、学外者の利用が認められていました。その条項によって調査・研究を目的とする一般市民の利用も広く行われていました。図書館の学術情報は広く共有されるべきである、<知識を共有する>という考え方です。この理念に基づき、ほとんどの大学図書館の蔵書目録は、インターネット上に公開されています。本学も平成9年度に「山口大学

蔵書検索」を公開しました。

学外者の利用は、長らく「館内閲覧」「複写」等の館内サービスに限定していましたが、「地域貢献」が大学の大きなテーマとなり始めた時期、平成10年1月から山口大学附属図書館は、一般市民を含む学外者への図書の館外貸出を開始しました。これは、国立大学附属図書館としては極めて早い時期に実施に踏み切ったものです。（工学部分館は平成11年4月、医学部分館も平成13年4月から、学外者への館外貸出開始）

### 一般市民の利用状況

一般市民への貸出に踏み切る際には、図書が返却されずに督促業務が増えるのではないかなどの懸念がありました。図書の延滞は皆無ではありませんが、学内者に比べはるかにマナー良く利用されています。むしろ、学生は地域市民と同じ閲覧室で、熱心に学習・調査・研究される姿に触発されていると思われます。図書館職員にとっても、多様なニーズを持って真剣に知識を求めて来館される地域市民の存在は、よい刺激となっています。

平成8年度以降の附属図書館学外者利用の推移を別表に示します。本館は、他大学・専門学校・通信制等の学生・教官、小中高校の教員、公務員、会社員、主婦、定年退職者等幅広い方々が利用されています。貸出図書の内訳は、大半が学術専門書で占められ分野も多岐に渡っており、利用者は強い目的意識をもって本学の図書館を利用していることがわかります。医学部分館では、他大学・専門学校学生・教官のほか、地域の医師・看護婦等の医療関係者が主に利用されています。利用の中心は学術雑誌の複写であり、医学専門図書館の特長が表れています。工学部分館では、他大学・専門学校学

生・教官のほか、教員、公務員、会社員等が利用されています。貸出図書は、工学関係の専門書が多くなっています。

平成12年度には、大規模な利用者アンケートを実施し、一般市民の方々のご意見もいただきました。多くの方から大学図書館の開放について、「ありがたい」という評価をいただきましたが、一方、「専門書、専門雑誌が少ない」、「蔵書が古い」、「貸出冊数を増やして欲しい」、「土日の開館時間延長」といった注文も見受けられました。

### <知の広場>の構築をめざして

去る10月13日（土）の山口大学祭（姫山祭）に、附属図書館は「オープン・ライブラリー2001」と銘うって、郷土史料の高精細デジタル絵図展示等の公開イベントを開催しました。一般市民の参加者も多数あり、最新のデジタル技術と古い絵図の対比等、おおいに興味をもたれたようでした。一般市民の図書館利用は着実に増えていますが、まだまだ「大学の図書館は利用できない」と思い込まっている方が大多数です。「オープン・ライブラリー」は、理念・目標の実現に向けて、より積極的に地域に開放する試みのひとつです。

社会の多様化、高度化、高齢化等に伴い、生涯学習は今後ますます重要性を増し、大学図書館の持つ学術資料に対する一般市民の利用要望はさらに高まると思われます。学生－研究者－地域市民の知的交流の場<知の広場>の構築をめざして、大学図書館は、進化・成長していく必要があります。

☎ (083)933-5181

FAX (083)933-5186

E-mail : teruka@po.cc.

yamaguchi-u.ac.jp

## ○本館 館外貸出は、平成10年1月から開始

	入館者数	登録者数	貸出人數	貸出冊数
平成8年度	280人	—	—	—
平成9年度	231人	30名	6人	12冊
平成10年度	415人	164名	337人	569冊
平成11年度	998人	262名	334人	534冊
平成12年度	1,872人	260名	356人	607冊

## ○医学部分館

	入館者数
平成8年度	736人
平成9年度	670人
平成10年度	503人
平成11年度	1,448人
平成12年度	1,402人

## ○工学部分館 館外貸出は、平成11年4月から開始

	入館者数	登録者数	貸出人數	貸出冊数
	182人	—	—	—
	107人	—	—	—
	157人	—	—	—
	293人	69名	69人	127冊
	290人	51名	105人	187冊



## 体育施設の開放について

### 体育施設の紹介

山口大学では、学内施設等の開放を行っています。その一つが、教室の開放です。たとえば大人数が受験する情報処理試験など、各種資格試験の会場として、また、就職試験（公務員試験など）の試験会場として頻繁に利用されています。

そして、もう一方の開放施設として、体育施設があります。それは上記の教室とはその目的・役割を異としています。体育施設とは、その名の通り運動をする施設で、大学には多くの体育施設があります。基本的に大学の施設は、体育の授業および課外活動が優先的に使用しており、その支障のない範囲内において地域の皆様にも開放しております。下記に山口大学が開放している体育施設をご紹介します。



**第1体育館 (1,804m<sup>2</sup>)**

昭和41年築  
一番大きな体育館です。  
バスケットコートならば2面とれます。

**第2体育館 (1,385m<sup>2</sup>)**



平成7年築  
2階建てで、1階はトレーニングルーム、  
2階はバドミントンコートが  
3面とれます。



**第1武道場 (642m<sup>2</sup>)**

昭和44年築  
畳と床に分かれています。  
主に柔道や空手など、  
武道系サークルが使用しています。

**第2武道場 (607m<sup>2</sup>)**



昭和48年築  
バスケットボールコートが1面、  
バレーボールコートなら2面とれます。

**陸上競技場 (23,128m<sup>2</sup>)**

3種公認のグラウンドです。

**野球場 (12,600m<sup>2</sup>)**

各野球サークル（硬式・軟式・準硬式）が練習場として利用しています。

**サッカー場 (10,540m<sup>2</sup>)**

夜でも練習できるように夜間照明があります。  
21時までは使用できます。

**ラグビー場 (11,620m<sup>2</sup>)**

こちらも夜間照明が設置されており、夜は、  
21時まで練習できます。

**テニスコート (12,600m<sup>2</sup>)**

16面あります。  
そのうち、オムニコートが4面、  
クレイコートが12面です。  
夜間照明付で、21時まで使えます。

ハンドボール場 (3,074m<sup>2</sup>)

ハンドボールの屋外コートです。  
ミニサッカー、フットサルにも  
使用されています。

アーチェリー場 (6,050m<sup>2</sup>)

アーチェリー部の練習場です。  
男子寮の裏手にあります。

馬 場 (2,826m<sup>2</sup>)

馬術部の練習場です。  
左隣には厩舎があります。  
現在、馬が9頭います。

弓道場 (524m<sup>2</sup>)

弓道部の練習場です。

ご覧のように、山口大学では、さまざまな用途に使用できる施設が開放されています。たとえばサッカー場などは、サッカーの練習場としてだけでなく、ラグビー場と組み合わせて、地区のソフトボール大会などの会場としても利用されています。



## 体育施設の課題

地域と大学との関わりを重視するうえで、スポーツでの交流を図るきっかけを作るこの体育施設の開放は、とても重要な役割を担っていると言えます。しかし、建ってから30年以上経過している施設が多く、老朽化による痛みは年を追うごとに激しくなっています。そのため、体育施設についても大幅な改修計画のもとに、みんなが安心して使用できるような施設にしていかなければなりません。また、使用者の方でも、各人が、次に利用する人のことを考えて使うように心がけていくことが、施設を使用する際には大事なことだと思います。

## 体育施設の学外への開放状況

平成11年度・12年度の学外者の使用状況は、下記の通りとなっています。

年 度 施設名	第1体育館	第2武道場	野 球 場	サッカー場	ラグビー場
平成11年度	2件	1件	3件	15件	3件
平成12年度		2件	5件	10件	4件

年 度 施設名	テニスコート	馬 場	アーチェリー場	合 計
平成11年度	1件	1件	1件	27件
平成12年度	1件	1件	1件	24件

学外者の使用件数は、年間だいたい25件前後になります。また、サッカー場のように、毎年、使用頻度が高い施設もあります。これは、常連でサッカー場を練習場として利用される方がおられるためです。  
 学外の方の体育施設使用に関しては、本学の授業および課外活動を優先的に使用させるため、なかなか思惑通りにいかないところがあります。また、使用料についても原則として前納であり、使用されなかった場合にもそのお金が返金されないなど、その辺りにも利用しづらい面があるかと思います。

利用してみたい施設や、その他質問等がございましたら、お気軽に下記までお電話またはメールしてください。

(学生生活課 課外活動担当 桂 仁)

☎ (083)933-5159

FAX (083)933-5040

E-mail : [GA103@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp](mailto:GA103@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp)

Homepage <http://www.sv.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kouseika/index.html>

## TOPICS

# 第6回 山口大学運営諮問会議議事録



■ 本田 正春 企画・広報室

## 第6回 山口大学運営諮問会議議事録

日 時 平成13年9月4日（火）

10時30分～14時20分

場 所 特別小会議室（事務局2号館2階）

出席者 松野浩二議長、岩田啓靖副議長、牛見正彦委員、河野康志委員

高本政次郎委員、中澤晶子委員、中島篤巳委員、中東素男委員

福田百合子委員 9名

欠席者 安藤忠雄委員 1名

陪席者 吉村副学長、鎌田事務局長

(事務局) 総務部長、経理部長、学務部長、施設部長、総務課長、企画・広報室長

教務課長、学生生活課長、企画係長、企画主任

## 議 事

### 1. 諮問事項「社会が求める学生教育の在り方について」の（提言）（案）について

議長から、このことについて諮られ、今回の提言は教養教育を重視した内容となった旨の説明があり、また、中東、中澤、河野各分科会座長に提言内容の主旨説明が求められ、各分科会座長から検討経緯を含めた主旨説明があった後、「社会が求める学生教育の在り方について」の提言（案）が承認された。

なお、提言は、会議終了前に松野議長から廣中学長に提出された。

### 2. 自主提言「答申まとめ」（松野私案）について

議長から、今回「答申まとめ」（松野私案）を作成した背景について説明があり、この私案に対して意

# TOPICS

見が求められ、各委員からは主に次の内容の意見があった。

(各委員からの主な意見)

- ア. 山口大学が国公私「トップ30」に入るには大学院を充実するとともに、学外の機関を利用又は学外に大学院を設けることも考えられる。
- イ. 山口大学は地方自治体等と共に大学改革を検討して頂きたい。そうすれば県内周辺大学は、山口大学の動きが良く分かり改革の検討が行いやすい。
- ウ. 山口大学の法人化はトップを切って行うべきである。
- エ. 大学は意志決定（学長）と執行（学部）に役割を明確に分離すべきである。
- オ. 山口大学の特色の中に、山口県の歴史資源や環境問題等を取り入れて頂きたい。
- カ. 山口大学の公開講座は内容が難しい。
- キ. 教育学部の再編・統合は避けられない。山口大学に現職教員の再教育の機能がなくなるのは困るが、他学部の大学院を充実して行うことも考えられる。附属学校は、教育学部の教育実習と研究の場であり、それらが地域貢献にあまり機能していないが、見直しはあっても廃止することは問題である。
- ク. 大学は研究する面の創造性を育むところがあるので、基礎研究をどうするかはいかに独創性を出すかにかかっている。
- ケ. 山口大学は、遠山プランを受入れて研究的な部分の選別を行う必要がある。人事面では教授会の閉鎖性を解いた人事管理を行って頂きたい。また、地域性では教養教育を重要視し、教養教育のコースマスターに教員の再雇用を考慮されたい。なお、教員選考には外部委員を半数程度は取り入れて頂きたい。
- コ. 山口大学は、研究の集中化・系統化は是非実施してもらいたい。
- サ. 山口大学は教官の評価方法に関連して、各学部の任期制の取扱いがまちまちであることは問題である。
- シ. 小郡町のサテライトはユニークであり、また、宇部市と山口市のジョイントとしての教養教育を小郡町で行えるように組織を作ることも考えられる。
- ス. 山口大学の教職員の評価は、良い・悪いを明確にする必要がある。
- セ. 山口大学は事務の集約化を早急に行う必要がある。
- ソ. 山口大学は地域とは何かを良く考え、目的を明確にし何ができるのかを考えて実行する必要がある。

### 3. 請問事項「学生生活の充実について」について

議長から、第3の請問事項「学生生活の充実について」について請られ、これに対する意見については、各委員が「大学における学生生活の充実方策について」（平成12年6月14日文部省高等教育局）を参考にし、9月末までに議長及び大学企画・広報室へ提出することとされ、提言については、議長がこれを取り纏めることとした。

また、松野私案に対する追加意見があれば、併せて提出することとした。

なお、今後の提言の取り纏め等については、10月末に全ての提言案を取り纏め、次回12月4日の会議において最終提言を学長に提出する予定とした。

以上

※ 議事1の「社会が求める学生教育の在り方について」の提言は、前号（2001.9 No.57）に掲載

## TOPICS

## 一日体験入学

## 山口大学一日体験化学教室

■ 阿部 憲孝 教授 理学部化学・地球科学科

「夢・化学21 化学への招待 山口大学一日体験化学教室」が、8月24日(金)山口大学理学部化学教室において開催され、実験や体験講義などが楽しく行われました。

## 目的と背景

近年、若者の理科離れが問題となっています。日本化学会や化学工業会では、いかにして理科に興味を持たせるか、様々な努力をしています。中・高校生を対象に、大学での化学の授業体験や簡単な実験体験をおして化学の楽しさと重要性を知らせ、化学への興味を抱かせることは、大変重要な事となります。また少子化のさけばれる今、いかにして高校生の目を山口大学に向かせるかも重要なことです。今回の催しは、山口大学理学部化学・地球科学科化学講座が中心となり、日本化学会中国四国支部及び化学工業会との共催、山口県教育委員会の後援のもとに、山口大学理学部化学教室の紹介と化学への誘いとして行われました。当日は、1年生から3年生までの高校生の他、高校の先生や化学を専攻していない大学生の参加もあり、指導にあたった阿部、藤井の両教官を含め33名で行われました。

## 概要

最初に、阿部教授が山口大学理学部、特に化学教室の研究内容、スタッフ等について20分程紹介し、その後質疑応答がなされました。授業体験では、阿部教授が「有機化合物と薬の話」と題して、化学の立場から、有機化学とはどのようなものか、薬とはなにか、アスピリンとペニシリンの話などについて、70分程度の授業を行い、その後質問を受けての解説がありました。内容が身近な薬についての話であったことから、幾分難しい内容にもかかわらず、高校生は興味を抱き、有機化学に親近感をいだいたようで、好評でした。

昼食(12時～1時)をとりながら、学部生、大学院生との交流、話し合いを行い、その後、午後の部としての体験実験がおこなわれました。また、物質分析化学研究室(田頭教授、村上助手)の協力を得て、同研究室の見学が行われ、大学院生との話し合いの機会も持たれました。

体験実験としては以下の5課題が行われました。

- 1 レゾルシノール樹脂の合成
- 2 合成洗剤を作ってみよう
- 3 蛍光染料を作り、蛍光ペンの成分色素の色を調べよう
- 4 液晶ペンダントを作ろう
- 5 コールドパーマをかけて髪の毛の変化を観察しよう

実験は藤井助手が中心になっての指導のもと、テキストに従って進められ、参加者のほとんどが5課題全てを行うことができたようです。

レゾルシノール樹脂の合成では、条件により様々な色のプラスチックが合成できることから高校生の興味をひき、全員が記念に合成品を持って帰宅したほどでした。

合成洗剤の合成では、市販されているような合成洗剤が容易に合成できることで、高校生の興味を十分に引いていました。

蛍光染料の合成は、実際にきれいな色素が合成でき、蛍光ペンの色と比べたり、酸性度の変化による色の変化を調べるなどをして、多くの興味がよせられていました。

液晶ペンダントの作成は、予め用意されていた数種の色の液晶をガラス瓶につめてペンダントを作るもので、色の変化が喜ばれ、幾つものペンダント作る高校生が多く見られました。

# TOPICS

当日の写真にみられるように、高校生はいきいきと楽しく授業を聞いたり、実験したりしていました。高校によってはほとんど実験を行っていないところもあり、高校生達は器具の使用に戸惑うところも見られましたが、おおいに楽しんでいました。

また話し合いのなかで、化学の勉強の仕方や山口大学への受験についての質問もあり、大学院生との交流で大学生の立場からの説明などもあり、高校生は山口大学への興味をかきたてられたようでした。

## 結果と展望

体験入学終了後アンケート調査を行いました。回収されたアンケートは、いずれも下記のように好意的内容であり、今回の企画は成功と考えられました。

- ・大学と化学を体験でき、大学が身近に感じられた。
- ・実験はとても楽しく、学校でできないことができてよかったです。
- ・授業は、高校ではやったことのない内容だったが、理解しやすかった。

・ちょっと高度な授業でしたが、その分大学や自分の夢への期待がつきました。

・とにかく面白かったです。名前も知らないような薬品がてきてとまどいましたが、実験が成功したときにはとても嬉しかったです。  
・このような企画は化学の楽しさがよく分かるので、今後も続けてほしい。

これらの結果から見ると、高校生は理学部化学教室に好意を抱くとともに、大学で学ぶ楽しさや理科を学ぶ楽しさを求めているようです。今後、さらに大学側からの理解しやすい大学像の発信を行うことの必要性が痛感されました。

☎ (083)933-5732

E-mail : abe@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp



筆者：中央

# TOPICS

## 国際交流



### 2001年日本留学フェア(台湾)

関心高く、  
多くの来場者で賑わう

■ 河野 笠子 講師 経済学部 留学生専門教官



#### 留学フェアの目的

日本留学フェアは、「開催各国の学生が、日本留学を志し、かつ、留学希望に合った大学やコースを選択し、実りある留学を達成できるようにするため、留学希望者及び進学指導者等を対象に、日本の大学の教育・研究上の特色等に関する最新的確な情報を提供し、日本への留学の促進を図る」ことを第一の目的として、日本国際教育協会（AIEJ）の主催により、平成元年から行われているものです。山口大学は平成7年から毎年参加しています。このフェアは、また、「短期留学促進のために、日本と開催各国の大学間の交流協定締結等についての情報交換も併せて行う」ことも目的とされています。

#### 背景には留学生受け入れ数の伸び悩み

文部科学省は、昭和58年、59年に出た二つの有識者からの提言等を踏まえ、21世紀初頭における10万人の留学生受け入れを目指して、「留学生受け入れ10万

人計画」というアドバルーンを掲げました。既に、目標達成の時期にさしかかっているにもかかわらず、我が国の留学生数は依然として7万人台を低迷しています。このような状況を打破する改善策の一つとして、日本の大学が世界各国で一堂に会して広報活動を行う、この日本留学フェアが実施されるようになりました。

#### 台風直後の台北でのフェア

2001年度の日本留学フェアの開催国は、インドネシア、マレーシア、韓国、台湾、タイの5カ国ですが、山口大学はこれまで留学生が比較的少ない台湾とタイのフェアに参加することを決め、私は、9月22日(土)、23日(日)に台北市で行われた台湾フェアに、後藤国際交流係長、西本理学部学務係員と共に参加しました。

9月21日昼頃、台湾国際空港に到着し出迎えのバスでホテルに向かいましたが、市中に入った途端に



# TOPICS

バスがほとんど動かなくなりました。そして、目に飛び込んで来たのは道路わきに延々と山のように積み上げられたゴミと水害の後片付けに追われる人々の姿。9月17日、18日と台湾北部を直撃した台風16号による豪雨で、あちこちが冠水した結果です。80名以上の死者を出した豪雨は、台北市の都市機能をマヒさせ、地下鉄や電車は運行停止、千棟以上のビルが浸水して営業停止を迫られたコンビニ、ホテル、金融機関なども続出、完全な復興には少なくとも2週間はかかるとニュースで報じられていました。

日本留学フェア（台湾）は、このような状況の中で行われました。会場となった、ニューヨーク・ニューヨーク・コンベンションセンターも地下の冠水で電気系統の回復が間に合わず、冷房無し、非常電源による照明と扇風機だけという汗だくフェアとなり、果たして来場者があるかしらと少し心配しながら開始の時を迎めました。

## 52大学が参加、2048名の来場者、山大ブースも盛況！

フェアは、各参加機関による広報活動と主催者による全体オリエンテーションの2部構成になっています。今回のフェアには、全国から52大学が参加。各々のブースで自校の紹介を行うと同時に個別面談で留学希望者からの相談に応じました。また、全体オリエンテーションでは、日本留学紹介ビデオの上映や日本留学経験者とAIEJ職員によるパネルディスカッションが行われました。

さて、山口大学のブースでは、我々3名と共に、通訳の劉幽蘭さんが来訪者を待ちうけましたが、台風後の悪条件にもかかわらず、初日から入場者が絶えず、最初の不安が全くの杞憂に終わったのは幸いというほかありません。結局、フェアには2日間で2048名が来場。これは昨年度よりも約600名多く、

上々の盛況ぶりだったと言えます。山口大学のブースに来た人は合計108名で、これも多い方でした。来訪者の顔ぶれは、高校1年生から中高年の男女まで様々。劉さんの話では、台湾では、近年、大学進学率が急激に上昇し、専門学校は軒並み大学に変わっているそうです。また、日本ブームで、日本への留学熱も高く、高校を出たらすぐに日本の大学に入りたいという若者からの相談や大学院へ進学したいという相談を多く受けました。子供を日本に留学させたいという両親からの相談もありました。現在リジャイナ大学に在学している息子を山口大学に交換留学をさせたいという女性も来て、山口大学について色々と熱心に話を聞いて帰りました。

## 面談で増す山口大学への留学希望

「もっと情報を」に応えよう！

私達が受けた質問の中で目立ったのは、日本語教育、渡日前受験、奨学金、宿舎、アルバイト等です。勿論、これ以上に多かったのは、講義内容や教官の専門分野についての質問ですが、これに対して詳しい情報を提供する資料をほとんど持ち合わせておらず、折角の熱意に十分こたえられなかつた事は残念でなりません。相談に応じている中で、研究生や大学院への出願の気持ちを強くしていく人達も少なからず見受けられましたから、大学にとって、こうした広報活動にきちんと取り組んでいくのはとても大切な事だと言えるでしょう。しかし、そのためには、山口大学が提供出来るメニューや教育内容をもっと詳しく載せたガイドブック作りが急務だと感じつつ、二日間のフェアを終わりました。



## TOPICS

## 国際交流

# 「アメリカ再発見プロジェクト」がスタート 米日財団後援によるアメリカ理解プログラム

■古賀 武陽 教授 経済学部国際経済学科

このたび、山口大学は米日財団（本部ニューヨーク、理事長ジョージ・パッカード氏）の後援により「アメリカ再発見プロジェクト」(Rediscover America PJ)を推進することになりました。本プロジェクトは、各教科を通じてアメリカについて教育している山口県内の教師に対する現地研修ならびに帰国後の副教材作成を通じてアメリカ理解教育の実を高めようとするものです。

プロジェクトの第一陣としてAグループ（団長：古賀武陽経済学部教授、副団長：芳賀良同助教授）の12名がさる8月17日、2週間の現地研修に出発しました。



## 4グループ、48名を派遣

アメリカは近年、高度科学技術の発達、IT革命の進行等により社会構造も急速に変化し、生活様式、価値観も一層の多様化を見せてています。一方では、自由、平等、民主主義、ボランティア活動といったアメリカの誇る多くの良き伝統が家庭や社会の様々なところで生き続けています。当プロジェクトでは「アメリカ再発見——家庭・学校・地域社会を中心」にテーマに、各地域のアメリカの実状を観察してくると共に、帰国後は映像・音声を含めたマルチメディアの副教材を制作して教育現場に届けることをめざしています。

計画では向こう3年間に4グループ、計48名が各州に派遣されます。県内の小中高で、社会科、地理、英語などの授業を通じてアメリカについての教育をおこなっている教師が派遣対象者です。

## 本年5月に正式スタート

このプロジェクトは、米日財団の呼びかけに呼応して中村幸士郎教育学部教授がプロポーザル作りに着手した1997年にさかのぼります。国際理解教育を担当されている同教授は、本プロジェクトが教育現場のアメリカ理解教育に大いに貢献するとの確信から、学内の複数の教授、助教授、県内の有力校の教師、また映像作成のプロとしてテレビ局からも参加を得て「プロジェクト計画委員会」を組織し、計画内容の立案に取り組み、同財団との長期間に及ぶ調整を経て2001年5月、山口大学廣中学長と日米財団ジョージ・パッカード理事長との間に覚え書きが交わされるに至ったのです。覚え書きの調印と同時に



出発前の研修会でいさつする中村代表

# TOPICS

に、計画委員会は実行委員会と名称を変え、右の組織図のように山口県教育長牛見正彦氏、山口大学教育学部長熊谷信順氏を顧問に、山口大学教育学部教授中村幸士郎氏が代表をつとめています。

## 2週間の現地研修を終えて

計画では向こう3年間に4グループがアメリカ各地を訪問しますが、その第一陣としてアメリカ東海岸・南東部を担当するAグループの12名が去る8月17日、福岡空港を飛び立ちニューヨークに向かいました。

9月11日の忌まわしいテロまであと1ヶ月足らず。あのような事件が起こるとも思えぬほどニューヨークは陽光と活気に満ちていました。

ここでの訪問先はニューヨーク市歴史博物館、メトロポリタン美術館、ニューヨーク証券取引所、エリス島、ニューヨーク市経済開発公社そしてロックフェラーセンターの企業オフィスなど。このあと、フィラデルフィア、ゲティスバーグ、ワシントン、ノースカロライナなどを訪問し、アメリカ理解教育に欠かせない歴史、文化、教育、ビジネスなどの現場を視察。

最終訪問地のノースカロライナ州では2泊3日のホームステイを通して、アメリカ人のライフスタイルに直接触れるという貴重な経験をすることができ



ました。

今回の現地研修に参加した教師からは、「多人種社会の実態に触れることができた」、「州による違いを実感した」、「パソコン教育が圧巻」など体験者ならではのコメントが寄せられており、今後の教育現場での活用が期待されるところです。

「アメリカ再発見プロジェクト」は、引き続きB,C,D各グループを派遣すると同時に、各グループが収集した資料、映像、音声などによるマルチメディア教材を作成することになっています。

なお、Aグループの帰国報告会がきたる12月9日午後2時より、大学会館で開催されます。どうぞご参加下さい。



自由の女神の足元で記念撮影

## 私の授業

### 夏の集中講義

### タニヒロユキ氏と 3人の仲間たちに による合同講義演習

山本 真弓  
助教授  
人文学部  
社会情報論コース

#### 1. はじめに

2001年9月10日(月)から13日(木)まで、大阪からタニヒロユキ氏を招いて、アジア比較社会論の集中講義が行われました。タニ氏はモンゴル語学・文学を専門とするエスペラント話者で、ヨーロッパ生まれの共通語エスペラント語とその思想文化を、アジア（中国、モンゴル）のエスペラント運動を通して紹介することで、比較社会文化論的な議論を展開してくれました。さらに、今回の集中講義では、講師のタニ氏の他、関西、関東から3人のエスペラント話者が集い、私自身も加わって、4日間の合同講義演習が実現しました。

#### 2. 授業という「舞台」の設定

率直に言って、一日あたり平均4コマの授業が4日間連続する集中講義は、体力的・精神的に（集中力の持続）に、学生たちにとっても相当厳しいものがあります。そこで、私たちが考案したのは、授業をひとつの「舞台」ととらえ、4人の役者がそれぞれの役回りを演じつつ、ときには学生たちにも「芝居」に参加してもらう、という方法でした。ここに主な「役者」を紹介しておきましょう。

主演：タニヒロユキ（主に講義担当、エスペラント共同体の歴史と現状、アジアのエスペラント運動、満州語、ヤズー語、エスペラント語の基礎文法とこれらの比較考察などを講義）

共演：臼井 裕之（主に演習担当、エスペラント語によるエスペラント語指導、エスペラント語通訳）

田平 正子（演習担当、エスペラント語通訳）

Hylco Miedema（演習担当、エスペラント語による「言語と社会」についての講演）

演出：山本 真弓・臼井 裕之

学生たちの意見／感想／質問をまとめた資料を配布し、4人のエスペラント話者によるパネル・ディスカッション、および、学生たちの質問／意見を中心とした議論／意見交換の場を設けました。

第一日目の午後の後半、「そうは言ってもエスペラント語って聞いたことがない」学生たちのために、臼井氏がエスペラント語によるエスペラント語の教授を試みました。そしてそれ以降、できるだけ多くの「エスペラント語による言語使用の実践」を学生たちの目前で演出するべく心を碎くことになりました。「エスペラント語って、生きた言葉なの？」という疑問に対しては、「百



#### 3. 「台本」の書き換えとアドリブ

初日の幕開けは、タニ氏による講義から始まりました。この授業は2年生から4年生、それに大学院生にまで開かれていたため、その多様な「観客」を惹きつけるのは容易なことではありません。静かに「観劇」する学生たちを「舞台」に引き入れるために、私たちは、毎回、質問／感想を書いてもらうことにしました。すると、学生たちの一人一人が、初めて出会うエスペラント話者（エスペラント共同体に生きる人々）に対して、実に多様な興味と関心をもっていることが明らかになりました。そこで、二日目以降は、前日の

聞は一見にしかず」だからです。これは、地域を持たないエスペラント共同体の「役者」がこれだけ揃うことではありません、という「演出会議」での判断の結果でした。こうして、準備していた「台本」に手を加える作業が連日行なわれたほか、福岡からエスペラント文学翻訳家の森真吾氏と、山口県立大学からポーランド研究家でエスペラント話者の渡辺克義氏がアドリブで特別出演してくれたといった場面も見られました。

#### 4. 学生=「観客」の笑い

最終日の午後。エスペラント語のラテン語的書きが、ヨーロッパ諸語を母語とする人々にどのように感じられるかは、日本人=非ヨーロッパ語を母語とするアジア人にとって、感覚的に理解できません。そこで、タニ氏は、モンゴル人言語学者が日本語を基礎に考案した計画言語（いわゆる、「人工語」）ヤズー語を紹介してくれました。ヤズー語の書きは、面白いほど日本語に似ています。ヤズー語の例文を皆で音読しながら、教室のあちこちから、クスクスと忍び笑いが聞こえてきました。それはやがて、教壇のタニ氏にも伝染し、「舞台」は「役者」と「観客」が一体となった和やかさの中で幕を閉じたのでした。

☎ (083)933-5242  
 E-mail : mayumi@  
 po.cc.yamaguchi-u.ac.jp



ヤズー語を話すタニ氏とエスペラント語を話すヒルコ氏

## 私の研究

# 音声を中心としたコウモリの生態と行動

松村 澄子  
助教授  
理学部  
自然情報科学科

昨年の10月に理学部に転任してきました。年寄新米教官ですが、4月から卒研生として研究室に加わった4人の学部生と院生1人の計6人の研究室を運営しています。

講義も受講することなく、「研究費はほとんど無い」と言った私の誠実な情報を鵜呑みにして、当研究室を選択した学生は勇気があるというか無謀というか、野生動物の活動期も収束に向かい、卒研データ収集も終盤へ差し掛かった今、おそらく後悔している気配です。

前置きが長くなりました。「私の研究」を紹介します。現在、幾つかのテーマを並行して研究を進めています。まとめると「音声にフォーカスしたコウモリの生態と行動」ということになるでしょうか。



只今お食事中！ヤンバルホオヒゲコウモリ

### 目下取り組んでいる研究

最も長期間、取り組んでいる課題は沖縄県西表島でのカグラコウモリの研究です。カグラコウモリは熱帯系の種なので、国内唯一種で、もちろん分布の北限種でもあります。またこのコウモリは、島が大陸と地続きだった古い時代に分布し、残存したといわれています。環境庁の絶滅の危機に瀕している野生動物種のリスト（レッドデータリスト）に絶滅危惧種として搭載されています。1983年から始めた研究は初期には保育行動、子の超音波音声の発達過程などの研究を行いました。一シーズンに多くの計画しないことを心がけ、最もデリケートな保育集団を消滅させることなく研究を継続してきました。1990年からは種を保全する基礎資料を集めるために、個体

標識法を中心とした生態研究に取り組んでいます。臍の緒を持つ新生児から計測を開始し、個体の成長追跡の資料を蓄えています。世界的に見ても、野生のコウモリ群における成長の個体追跡が最も詳細に行えている研究と自負しています。10年余り、継続的に収集された結果から、この間の気候変動に応じて可塑的に変わる成長特性や、不安定な当地の自然災害（台風・豪雨）に対するリスクを回避する繁殖特性などが明らかになりつつあります。その他のテーマとしては国内や、中国、台湾など東アジア地域の照葉樹林に棲むコウモリ類の分布の研究を続けています。標本採取だけでなく、コウモリが狩の際に発声する超音波の録音や狩行動を記録し、音でコウモリ種を判別する方法を模索中です。これに関連して4年前沖縄本島の北部（通称やんばる）の森でコウモリの新種を2種発見しました。2種とも遺存種で、やんばるが昔、大陸とながっていたことを示す証拠となりました。

現在進めている研究の他、コウモリの狩行動と餌昆虫の防衛行動などの研究にも興味があり、準備を進めています。



カグラコウモリ

## 私の研究

# 角膜上皮創傷治癒の研究と新しい治療法の開発



西田 輝夫  
教授  
医学部分子感知医科学講座  
(眼科学)

私たちは自分を取り巻く環境の変化を感覚器（五官）で認識し、自分自身の体や心の働きを調節しています。特に物を見るという視覚に多くの情報を依存して生活しています。

### 角膜について

眼は外界の情報が最初に体に入る臓器ですが、その一番表面に存在しています角膜は眼の窓とも言われ、透明で光の眼の中への入り口にあたる部分です。角膜はわずか0.5mmの厚みで直径11から12mmの小さな組織ですが、透明であることに加え目の奥の網膜に光の焦点を結ぶレンズとしての機能を果たしており、視覚を維持する上できわめて大切です。一方、角膜の表面は涙で覆われて乾燥しないようになっていますが、目の一番外側に存在していますから、しばしば細菌などの感染症や外傷の標的となります。角膜の表面（上皮）に傷がついても普通はすぐに修復されますが、一部の患者さんでは角膜上皮の欠損が遷延化することがあります。

ます。上皮は大変しっかりといたバリアですから、欠損したままでは角膜が徐々に混濁してきます。私の研究は主として角膜上皮の創傷治癒機序の研究と角膜実質細胞の機能調節の研究です。特に角膜上皮が修復しない遷延性角膜上皮欠損の治療薬の開発に約20年携わってきました。

### 自己血漿由来フィブロネクチン点眼療法

角膜上皮が欠損しますと、実質内にフィブロネクチンといわれる細胞の接着性に関する糖たんぱく質が出現します。角膜上皮細胞はこのフィブロネクチンに極めてよく反応しフィブロネクチンを足場として、その上で大きく拡がり細胞の移動も活発になります。傷をつけた動物の角膜上皮にフィブロネクチン点眼を行い、その創傷治癒が促進することを明らかにしました。1980年代初めにはフィブロネクチンは市販されていませんでした。しかし、幸いフィブロネクチンは血液中に存在しますので患者さん自身の血液から約1時間でフィブロネクチンを精製し、自己フィブロネクチン点眼薬を作るシステムを開発し自己血漿由来フィブロネクチン点眼が難治性の遷延性角膜上皮欠損の治療に極めて有効であることを報告しました。ただ残念なことに国の血液製剤に対する考え方から、どうしても製薬会社によってフィブロネクチン点眼薬を開発することができません。いまだに20年前と同じように患者さん本人の血液からフィブロネクチン点眼薬を精製する方法を踏襲し、山口大学医学部附属病院眼科を始め全国的に治療に用いられています。

### サブスタンスP+インスリン様成長因子点眼療法

一方、フィブロネクチン点眼療法を行っているうちに、このような症例はほとんど角膜の知覚が低下して

いることに気づきました。そこで培養した家兎角膜を用いて、神経伝達物質であるサブスタンスPとインスリン様成長因子-1とが相乗的に角膜上皮の創傷治癒を促進することを見出しました。実際に角膜知覚が低下し角膜上皮に障害のある（神経痺性角膜症）の症例に用いたところ、角膜上皮欠損が速やかに治癒し有効な治療法であることが明らかとなりました。このように私たちの研究室では、角膜上皮障害の新しい治療法を世界に先駆け見出し今までの治療法では治癒できない方のお役に立っています。

### 研究の特徴

私たちの研究の特徴は、現在の医学で治すことのできない病気に対して、患者さんの診察を大切にし、病変がどのような機序で生じているのかを考え、次に新しい治療法や診断法の開発を究極の目標に定めて研究を行っていくことです。科学的な研究の前に、しっかりと臨床医学が必要であり、また臨床の前に科学的根拠が必要です。科学に裏付けられた臨床医学を目指して1999年に『角膜疾患の確定診断：透明・屈折の基礎から臨床まで』(Medical View社)を上梓しました。私たちは今まで誰も治療できなかった疾患を世界で最初に治療する方法を幸い二つも見出すことができました。今後はこれらの知識をもとに人工角膜を作り再生医学を行うための研究を進めています。

☎ (0836)22-2277,

E-mail : nishida1@

yamaguchi-u.ac.jp)

# 読者の声

## コップンカー (ありがとう) タイ王国

吉武 千草（看護2年）  
 常岡 由子（看護2年）  
 久保 真由美（看護2年）  
 圓師 宏美（看護2年）  
 藤田 直子（看護2年）  
 迫田 涼子（看護2年）  
 柏原 麻紀子（衛生2年）  
 土谷 真里（衛生2年）  
 為平 千奈美（衛生2年）  
 医療技術短期大学部

私達、医療技術短期大学部は、タイの看護大学BCNNVと学術交流協定を結んでいます。そのExchange programとして9/2~9/16までの2週間、学生9名、教官2名でタイを訪れました。このプログラムは、私達が第1回目ということもあり、不安と期待を膨らませて出発しました。

それでは、タイでの2週間の生活をご紹介しましょう。まず第1週目は、健康・医療の学習として、バンコクで開催されている健康博覧会へ

行き、健康食品・健康商品など様々な催し物を見学したり、また、エイズ学習として、エイズ患者との対面やエイズを予防する活動をされているNGOの団体の方の話を聞くことができました。エイズは、タイで大きな社会問題となっており、そのエイズ患者さんが、病院から排除されることがないように、また、全ての患者さんが薬を手に入れることができるように懸命に活動されている様子が伝わってきました。また、タイの伝統医療の学習としてタイ式マッサージやサウナを体験しました。タイでは、伝統医療をとても大事にしており、マッサージやハーブ療法など、心の底からリラックスでき快適で、身をもってタイ独自の医療を学習することができました。その他、タイの厚生省を訪れて、タイにおける看護教育などの講義を受けることもできました。第1週の後半には、BCNNVの生徒とのプレゼンテーションが行われました。そこで、私達は、日本のヘルスシステムや文化を発表する機会がありました。この機会を通して、私達は、大切なことを学びました。それは、この発表の準

備をしていく中で、私達自身がいかに日本のシステムを理解していないか、日本の文化について知らないかということを身をもって痛感させられたことです。タイに行き、異文化を学べたことは言うまでもなく、それと同時に、タイと日本の比較しながら、日本の良い点、悪い点を見つけることができ、改めて私達の知識や日本という国を振り返る良い機会になったと思います。夜の交流会では、立食パーティーをしながら、タイのダンス、日本の茶道や剣道を紹介し合いました。タイの学生は明るくて、とても積極的で、私達にどんどん話しかけてくれました。近くに寄ってきて、いつも手をつないで引っぱってくれて、笑顔で迎えてくれました。その学生や先生方の優しさ、温かさが強く伝わってきて、緊張していた私達も、自然とリラックスすることができました。

週末は、文化学習としてバンコクから少し離れたアユタヤを旅行しました。タイの伝統工芸品を見学し、その美しさに感動しました。その夜は、ロフトで川を下りながら夕食をとり、タイの学生たちとロフトの端に座り、いろんなことを語りました。学校でのこと、故郷のこと、友人のことなど…。このロフトで食事をし、楽しく踊ったこと、みんなで笑って語ったこと、一緒に寝たこと、そしてあのきれいな夕日の美しさは決して忘ることはないでしょう。

第2週目は、この旅が始まって以来、初めて9人がバラバラになって行動することになりました。それは、衛生技術学で1つ、看護学科で2つのグループをつくり、地方3ヶ所に分かれて学習をするというプログラムでした。その3ヶ所とは、「マヒドール大学」、「ラチャブリーの看護大学（BCNR）」、「コラートの看護大学（BCNN）」です。

それでは、各地方での様子をご紹介しましょう。



グランドパレス（故宮）の前で



週末のアユタヤの旅での、川下りの様子

#### 〈マヒドール大学〉

私達、衛生技術学科の3人は、マヒドール大学検査学部を4日間訪問しました。マヒドール大学は、タイでは医療教育の発達した総合大学でした。4日間のうち、授業に参加したり、学生との交流、大学病院検査部の見学、解剖博物館の見学をしました。授業は、みんなとても熱心に受けていて、活発な意見の飛びかう教室でした。タイの学生は、とても英語が上手で、よく話しかけてくれました。マヒドール大学には、私達3人だけで訪問したので、最初はとても不安だったけど、マヒドール大学の先生方や学生がとても親切だったので、充実した4日間になりました。

#### 〈BCNR〉

私達、看護科の3人は、BCNRを訪問し、学生との討議、交流会、地方の保健所、保健センター、村単位のヘルスボランティアへの訪問など地域医療を中心に見学してきました。このラチャブリーの訪問で最も興味深かったことは、タイでは、日本以上に地域保健のシステムがしっかりと確立されていることでした。地方の保健所、その下にさらに小さい地域単位の保健センター、その下に村単位でのヘルスボランティアによる保健活動というように、個人だけの

責任ではなく、地域全体で住民の健康を守っていこうとする姿勢が強く伝わってきました。しかも、一番、住民に密着している村単位での保健活動は、その名の通り、住民の健康をボランティアチームで支えているのです。主婦の人、現役の仕事を引退された人など様々な方がいらっしゃいます。その心の温かさ、みんなで健康増進に取り組んでいこうという熱い想いが伝わってきて、すごく感動しました。このようなシステムは、日本が見習うべき点だと思います。

ラチャブリーでは、この他、交流会でタイダンスの披露、書道、茶道の紹介など一緒に踊ったり、書いたりとても楽しい時間を過ごすことができました。最終日は、学生や先生方と共に、あの有名な水上マーケットでショッピングをし、とても貴重な体験ができ嬉しく思います。この4日間、英語の苦手な私達に、優しく一生懸命分かりやすく解説してくれ、いつも笑顔で私達を迎えてくださった人々と出会うことができ、とても感謝しています。

#### 〈BCNN〉

私達が訪れたコラート地方では、伝統医療が再び見直されており、病院にも、マッサージやサウナ施設が新しく建てられていました。医師のいない診療所では、その地域の人々が資金を出し合い、サウナ、マッサー

ジ施設を建てていました。日本では今、先端医療が進んできており、伝統医療を行っている病院が少なくなっています。しかし、伝統医療にしかない良さがあると思いました。地方の人々は、病院に医師が少ないためか、予防の一つとして、マッサージやサウナを重視している人が多いと感じました。その他、最近になって訪問医療が始まったようです。

しかし、全集落を訪問するには限りがあるなどの問題があります。そこで、各集落のヘルスボランティアが自主的に訪問し、住民の健康をサポートしています。

彼ら、ヘルスボランティアの人々は、主にアロエなどの植物を使用して治療を行ったり、病気になるのを予防したり、狂犬病対策を人々に呼びかけるなどが主な活動でした。

このように、地域医療が、本当に地域の人々に密着し、地域の人々の力が、主となって保健活動が行われていることに、とても感心しました。また、私達は、村に行って、とても感動することができました。それは、医療スタッフの方が、とても生き生きして誇りを持って行動していることです。私も医療従事者になりたいという誇りもやる気もあるつもりです。しかし、彼らには、それ以上の力があり、私は圧倒されてしまいました。この差は何だろう?と考えました。それは、彼らは、何軒かに1人の代表として選ばれた方で、その村の人々を守ること=家族を守ることという気持が強いということではないかと思いました。

それぞれの旅から帰ってきた私達は、再び、バンコクで黄金に輝くグランドパレスや週末マーケットなど残りのタイを楽しみました。そして、お別れの日。お世話になったBCNNVの先生や生徒が、温かく私達を抱きしめてくれました。その時、この2週間に触れた人々の優しさ、親切さ、とてもアットホームな雰囲気、様々

な思い出が蘇り、涙が止まりませんでした。

この旅で、多くのことを学び、感

動しました。この経験を忘れずに、これから先の生活に活かしていくけたらと思います。1年生の人は、来年

ぜひ参加し、自分の視野をどんどん広げていってください。

## 寄稿文

### 現代日本語会話考 —婉曲表現など—



溝田 忠人  
教授  
工学部  
機能材料工学科

かなり前、工学部のバス旅行で九州に行った。若いバスガイドさんが一生懸命に「右手の方に見えますのが、玄海灘のほうになります。」「トイレ休憩のほうは、10時頃、古賀サービスエリアの方になります。」、万事この調子で、正しい「方」も混じって「ほう」を、正に連発する、数えようと「正」の字をノートにつけ始めた。おかげで、その道中は何処で何を見たのか、殆ど覚えない。最近、この「ほう」「ほうになります」が幅を利かせている。コンビニで「文房具のほうは左手奥の方でございます」。金を払うと「レジペーパーのほうになります」と手渡す。卒論発表会では「次が、今回作製した装置の写真のほうになります

す」。大概は「…です」で済む所である。また、ファーストフード店などの売り子さん「ありがとうございます」と最後を大声で伸ばして最初の肝心な所を早口で小さく言う。まるで「まーす」とだけあっちこっちから聞こえる。考えてみると「有難う」も変な言葉だ、「貴方のご好意は世に有り難いほど貴重でございます」という意味だったと思われるが、「有り難い」（稀である）だけが残ってお礼の言葉になっていて、最近は「まーす」にとって変わりそう。形骸化は日本語の本性であろうか。その点Thank youはキチンと貴方に感謝している。大学の会議でも面白い用語を耳にする「骨太案」。最初聞いた時、ずつしり重い練り上げた案かと思ったが、未だ検討不十分の案のことのようだ、試案・草案がなぜ骨太になったか考えていたら会議が終わった。次の会議で「事務かた」というのが気になった。これも「方」ではある。「北の方」なんていう言葉はあったし、「事務」とだけいうのは気が引ける、「事務局」ではやはり「つぼね」みたいで同じことか、などと考えていたら会議が終わった。婉曲表現は、確かに他人に気を使う場合必要になる。しかし、使い方を旨くやらないと、漫才のねたである。「語尾上げ」も気になる流行である。アナウンサーがやたらに会話中に「はい」と合いの手

を入れるのも掛け合い漫才では普通だが聞きづらい。テレビタレントが「…じゃあないですか」とょっちゅう言うが、これも普及し、耳に引っかかる。学生が研究室に来て「先生、明日の講義があるじゃないですか」と切り出すと、（なぜ肯定文を否定疑問文でいうほど複雑な文章を組み立てるのだ、テストの点と見合っていないじゃないですか）と心がきしむ。さしづめ英語では「…, isn't it?」であろうが、分脈によっては「…, aren't you?」などとならざるを得ないから、耳につかないだろう。同じ表現で連発されてはたまらない。最近の「ひらかな英語」は勘弁して欲しい。「“ぐっど・ふーど・ぐっど・らいふ”的おおくり致しました」と番組の最後に言われると、\*\*\*はドッグフードの会社だったのかと意地でも誤解したくなる。

小学6年生の夏だったか、猿を飼っていた伯父の家で、初めて会った遠縁の高校生のお姉さんが猿のしぐさを指差して「まあ、あのポーズ、ほほほ」と笑った。白いセーラー服の輝くような眩しさだった。それ以来「ポーズ」というハイカラな言葉が気にいって、聞くたびにその情景を思い出す。しかし、私にとって、それ以後ポーズという言葉がその時以上に魅力的に使われたことは無い。ばっちりその場にはまったく表現こそすばらしい。ルーズソックス、茶髪、改組と流行ると反発する世代、ついに言葉にも反応するようになった。これを読んで、読者の会話が困難にならないことを祈ります。

## 教官著作書の紹介



「近視レーザー手術 手術を決断する前に」(保健同人社2001年6月)

近視は眼の疾患の中で最も頻度の高いものである。しかし、最近までは眼鏡やコンタクトレンズによる矯正しか行われていなかった。したがって眼鏡やコンタクトレンズのような補助具なしで世界をはっきり見たいというのは近視の人の長い間の夢であった。レーザー工学とコンピューター工学の進歩により、エキシマレーザーを用いて角膜の表面を切除して屈折を変化させ近視を矯正する手術が近年臨床的に受け入れられるまでに進歩してきた。しかしながら、手術という性質上近視レーザー手術はいったん手術を受けると元には戻らないという性質がある。本書は、一般の方を対象に、わかりやすく近視とはどのような病気なのかの解説から始まり、現在行われている眼鏡による矯正、コンタクトレンズによる矯正さらに手術による矯正それぞれの長所短所を述べている。最終的に、手術を受けるかどうかを決定するのは患者さんであり、副題に示すように手術を決断する前に十分理解しておくべき事柄を平易な文章で述べられている。

西田 輝夫 教授 医学部



「New Directions in Antimatter Chemistry and Physics」

(Kluwer Academic Publishers, The Netherlands 2001年7月)

我々の住むこの宇宙は電子、陽子、中性子等「粒子」群と、これらからなる原子分子を主な構成物質として出来上がっている。しかしこれら粒子の他に「反粒子」と呼ばれる粒子が存在している。反粒子とは、粒子と質量は同じと考えられているが、反対の電荷を持った粒子である。これらには電子の反粒子として陽電子、陽子の反粒子として反陽子等の存在が知られている。これら反粒子と粒子が接触すると瞬く間にガンマ線を放出して両粒子が消滅(対消滅と呼ばれる)してしまう。この対消滅 자체摩訶不思議なイメージを人々に与え、さらに放出エネルギーは大変大きいため、このテーマを題材にしたSF小説や映画などをご覧になった方も多いであろう。

最近、陽電子、反陽子を用いた様々な物理化学実験が可能になり、全く新しい基礎科学の多く知見が得られてきている。この「反粒子」と物質との相互作用すると「粒子」と物質との相互作用の研究からは見てこなかった様々な新しい現象が見られ、反粒子と粒子による現象を比較検討することで、我々の世界で経験する多くのミクロ現象の本質がより深いレベルで理解で来るようになる。応用面でも反粒子を材料の試験や探査の手段として用いることで今まで知られていなかった現象が幾つも見つかっており、新しい応用技術の発展も見られる。この本では、これら反粒子と物質の相互作用についての研究の最先端をレビューしている。

季村 峰生 教授 工学部

「著作書の紹介」を公募します。お問い合わせは巻末担当係までお願いします。

### 公開講座のお知らせ

講 座 名	開設期間	受講対象者	開催会場	問い合わせ先
やまぐち学コース 「山縣周南を読む」	10月13日(土) ～ 12月15日(土)	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200
外国語学習コース「中国語中級読本－小品を味わう」	10月13日(土) ～ 12月15日(土)	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	人文・理学部庶務係 TEL 083-933-5200

## 新聞掲載された山大・地域から見た山大

### 9月

- 地道な草の根交流結実  
山大生と韓国学生の相互訪問（毎日：1日）
- やまぐち見聞録 山口TLO 2年間の成果は?  
52件の特許出願うち13件技術移転（毎日：2日）
- 新たな産業創出へ 「起業シティ」オープン  
山大生ら若手起業家が運営（毎日：2日）
- HPづくりを親子で学ぼう  
山大教育実践センター（中国：4日）
- 学部再編策など提言 一山口大諮詢会議—  
「思いきった改革必要」  
(中国・朝日・毎日・山口・読売：5日)
- 独立行政法人化広中学長が意欲（朝日：5日）
- 山口大学経済学部公開講座  
「これからの日本の景気はどうなるか」（毎日：6日）
- 土曜カリッジ受講生を募集  
山口大人文学部（朝日：14日）
- 笑いで長寿祝う 一落語や物まねを楽しむー  
山口大落研ら熱演（宇部：14日）
- 山口の学生起業家  
ITフェアに出展（日経：18日）
- 産学官フォーラム講演も  
宇部で中国地域研究開発交流  
(防長：20日・中国：21日・中国：22日)
- 山口でこそ起業を（中国：26日）

### 10月

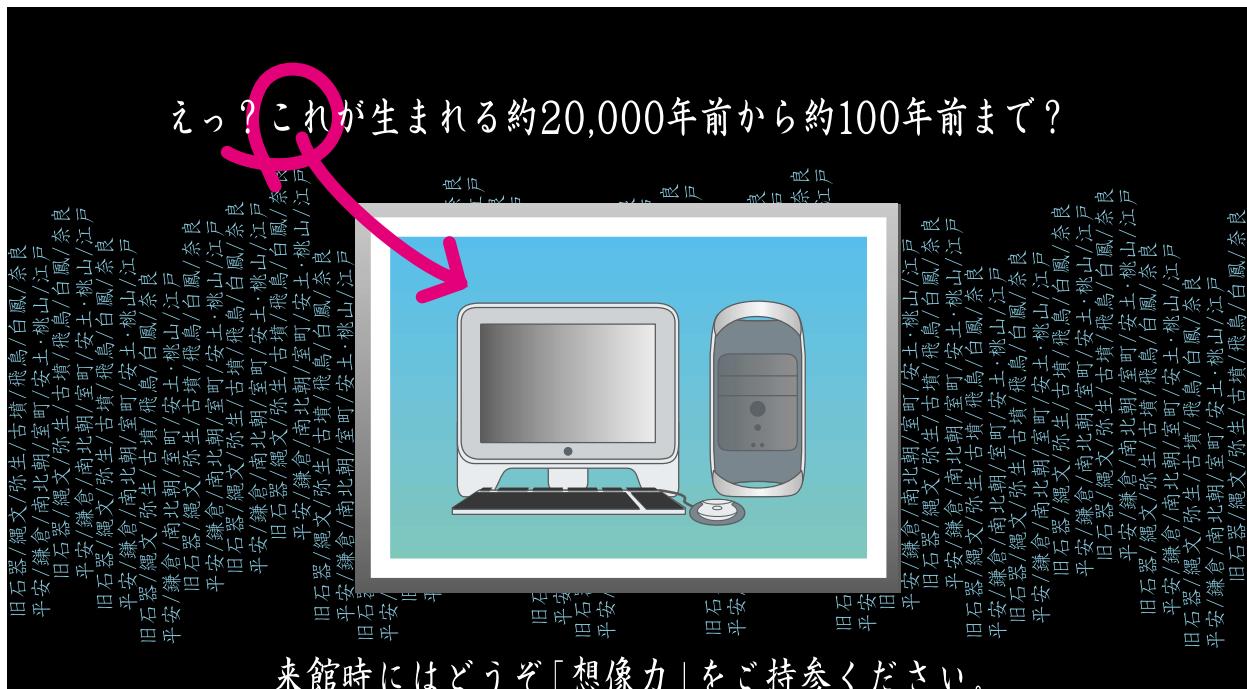
- 130人集い発足式  
全国初の応用医工学系  
一山口大大学院ー（山口・宇部：4日）
- 地域通貨でゲーム  
来月11日山口大で 流通の可能性探る（毎日：5日）
- 知りたいやまぐち 一自然災害①ー  
日ごろから心構えを  
山口大工学部教授 山本哲郎氏（朝日：5日・12日）

- 150年前の絵図をデジタル化 一山口大図書館ー  
「小郡宰判図」13日の大学祭で公開（西日本：8日）
- 後期生を募集  
山口大「カレッジ」（中国：6日）
- テロ事件受け13日にシンポ 一山口大ー  
(朝日・中国：10日)
- 山大の大和田氏ら追加隊員7人発表 一南極観測隊ー  
(山口・西日本：12日)
- 広中学長学園祭でマルはだか?（毎日：14日）
- 未来の教員どう育てる  
一山口大で研究協議会ー（中国：13日）
- 山大病院長に沖田教授選ぶ（宇部：12日・朝日：13日）
- 単位認定甘過ぎない?  
「学力不足でも」過半数の授業で  
「出席も考慮」3分の2  
一山口大調査回答384科目（読売：14日）
- 演劇の面白さ広めたい  
山口大演劇サークル  
「劇団くろこ」の代表後藤陽一さん（山口：16日）
- 山大経済学部が24日に講演会（山口：17日）
- 自分の曲オーケストラで =山大管弦楽団が演奏協力=  
仁保中3年石川さん 文化祭にビデオ披露へ  
(毎日：17日・中国：26日)
- 月曜日インタビュー  
応用医工学系専攻が発足した山大医学部長  
加藤紘さん（山口：22日）
- 地域通貨「ワピー」試み  
山口大が来月から市民と交流めざす（朝日：23日）
- 野菜収穫体験しよう 一山大農学部ー  
来月3日小学生50人を募集 8山口：23日)
- 死亡牛細胞からクローン  
氷点下35度で凍結保存 =山大教授らー  
(毎日：26日・朝日：31日)
- 学生たちが取材・構成 一TYSー  
27日未明に3時間生放送（毎日：26日）
- 高齢者に元気与えたい  
山口大学工学部の川地厚史さん（山口：27日）
- 山大生と児童脱穀作業を体験（山口：29日）

## 大学など地域開放特別事業のお知らせ

講 座 名	開設期間	受講対象者	開催会場	問い合わせ先
企画展示「出土品にみる山口県の歴史ー山口大学埋蔵文化財資料館蔵品ー」	10月13日(土)～12月21日(金)	小・中学生から一般の方まで	山 口 大 学 埋蔵文化財 資 料 館	山口大学埋蔵文化財資料館 TEL 083-933-5035
公開授業「考古学って何だろう?ーいろいろな出土品を見てみようー」	12月2日(日) 午後2時～4時	小・中学生から一般の方まで	山 口 大 学 埋蔵文化財 資 料 館	山口大学埋蔵文化財資料館 TEL 083-933-5035

埋蔵文化財資料館 企画展示公開中のお知らせ



来館時にはどうぞ「想像力」をご持参ください。

# 第17回企画展

# 出土品による山口県の歴史

—山口大学埋蔵文化財資料館蔵品—

**2001年10月13日(土)～12月21日(金)**

開館日 月～金曜／開館時間 午前9時～午後4時30分／入館無料

## 大学等地域開放特別事業

## 公開授業 「考古学ってなんだろう?—いろいろな出土品を見てみよう!」

とき：12月2日（日）午後2時より（受付開始は1時30分）

ところ：山口大学吉田キャンパス内 大学会館

参加料：無料

主催：山口大学埋蔵文化財資料館 後援：山口市教育委員会

山口大学埋蔵文化財資料館蔵品を中心として、県内の遺跡についてわかりやすく解説する内容で、どなたでも参加できます。

詳しくは、資料館に直接または電話、FAX、Eメールでお問い合わせください（会場準備等のため11月12日までに申し込みをお願いします）。

# 山口大学埋蔵文化財資料館

〒753-8511 山口市大字吉田1677-1  
TEL/FAX:083-933-5035 E-mail:[yuam@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp](mailto:yuam@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp)

## 原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学外の約500の機関に配布します。

### ア. Q & A 欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職（学生の場合は学年）、年齢を付して文書でお願いします。Q & A 欄に採用させていただくときは、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

### イ. 催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせください。

ウ. 「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来のあるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

### 【執筆要領】

上記ウについて、執筆要領は次のとおりです。

1. 原稿（図、表を含む。）は40字×40行で、できるだけワープロでお願いします。第1行は題名、2行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は4行目から始めてください。本文は3～4に区分し、小見出しをつけてください。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思いますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次の枠内のような形になります。

ワープロを用いない場合は、400字詰原稿用紙4枚以内で、ワープロの場合の要領に準じてお願いします。

ワープロで原稿を作成された場合、お差し支えなければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第1行 題名

第2行 氏名、所属部局名、研究室名、職

第3行 (空白)

第4行 本文始まり

•

•

第40行 本文終わり

(T E L \_\_\_\_\_)

2. ご自分が写っている写真を一枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々の問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただきても結構です。

〒753-8511

山口市吉田1677-1

山口大学総務部企画・広報室

広報・調査係長 有吉義和

☎083-933-5007 FAX 083-933-5013

E-mail : yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

## 編集後記

2001年9月11日のニューヨークでの事件以来、世界は確実に暗い方向に進んでいるようです。マスコミは一斉に「同時多発テロ」という表現を用いましたが、これはテロを計画する側の「用語」ではないかと、細かいことまで気になってしまします。日本政府は今回の事件を機に日本の外交・防衛（軍事）の基本方針を大きく転換する選択をとりました。さらに気になるのは、これら一連のできごとに対して、とくに若い人たちの関心があまりにも低いことです。別に「たきつけていた」わけではないですが、まさか「議論する価値もない」ということではないでしょうね。

YU Information では、ほぼ毎号それぞれテーマを設定して特集を組んでおり、今回は山口大学の社会貢献活動を取り上げました。ほぼ1年前にも「地域との交流」をテーマに特集を企画をしましたが、今号ではセミナー やシンポジウムなど、従来から行われている社会貢献活動に加えて、各学部で独自に取り組んでいる活動も紹介していただきました。これらそれぞれが「山口大学のセールスポイント」として地域社会から認められれば、山口大学もこれからの「評価社会」に耐えていけるのではないかと思っています。

「大胆な改革」はわかりやすいですが、「地に足がついた継続的な努力」の方が私たちには向いているような気がします。

(森田 昌行)

◎山口大学ホームページ [http://www.yamaguchi-u.ac.jp/index\\_j.html](http://www.yamaguchi-u.ac.jp/index_j.html)

### 山口大学広報第五十八号

平成十三年十一月二十日発行

編集発行 山口大学広報委員会

(総務部企画・広報室)

住 所 .. 山口市大字吉田一六七七一一  
電 話 .. (083) 933-5007  
F A X .. (083) 933-5013  
E-mail : [yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp](mailto:yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp)  
印 刷 .. 児玉印刷株式会社

#### 広報活動専門委員会委員

<b>専門委員</b>	小谷 典子 (委員長 人文学部)
	坪郷 英彦 (人文学部)
	福田 隆眞 (教育学部)
	マルク・レール (経済学部)
	小宮 克弘 (理学部)
	東 玲子 (医学部)
	森田 昌行 (工学部)
	宇佐見晃一 (農学部)
	善甫 宣哉 (附属病院)
<b>(アドミニッションセンター)</b>	
小林 熊谷 邦和 武洋 (工学部)	堀江 穆 (教育学部)